

Interfaculty Initiative in Information Studies
Graduate School of Interdisciplinary Information Studies
The University of Tokyo



学環府

number

23

パワフル朝鮮研究

「子どもが生まれてから研究スタイルを変えざるを得なくなりました。」

今を“これまでため込んできた資料の蔵出しの時期”と語る真鍋先生ですが、蔵の中身はぎっしり詰まっているようです。そのほんの一端をご紹介します。

Q 韓国の研究をされるようになったきっかけは？

本当は文化人類学をやりたいのに、共通一次試験に失敗して教育大へ不本意入学し、五月病だった時に中国大陸への「侵略」か「進出」かという教科書問題に遭遇しました。教育大生の立場でどんな研究ができるかを考えた時、じゃあ歴史教科書の比較研究をやってみようと思いついたのがきっかけです。中国や東南アジアの国々でもよかったです、どうせなら誰もやらない言語をやろうと思って韓国語にしました。ラジオ講座もない頃で、周囲に留学生もいなかったの、入門書で一通り文法を勉強したあとは韓国の中学校の「国史」教科書を購入して、一字一句辞書を引きながら訳していく作業に没頭しました。

教育大には学校教科に関係のない文化人類学の先生はいないし、韓国研究も当時はマイナーだったので、どうしたら手づるをつかめるか、いつも模索していました。新聞で朝鮮関連の勉強会や講座の案内を見つけては足を運び、韓国人の先生が書いた人類学や民俗学の本を読めば、すかさず著者に下手な韓国語で質問の手紙を書き、「来なさい」という返事が来たら、もうすっ飛んで行くみたいなきもちでした。バイトして年に2、3回は韓国に通っていました。

Q 韓国の社会運動を宗教的観点から研究されていますが…

2度目の修士時代に2年間、韓国の大学で日本語教師をする機会に恵まれました。韓国の学生運動が最後の盛り上がりを見せた91年です。4月にある大学の1年生がデモで機動隊に殴り殺され、その死に対する抗議の自殺を図った人が11人、うち8人が亡くなりました。各地で自殺者が出るたびに、私の大学のエントランスホールにも自殺者の遺影と焼身の現場や黒くげ死体の写真が祭壇に飾られ、その年の4月から5月にかけてはいつも線香の煙でむせ返っていました。その時に“これは政治スローガンに掲げた社会運動ではあるけれど、内実は宗教じゃないのか。根底にシャーマニズムや儒教倫理に由来する、何か韓国人の心性を突き動かす文化的要因が絡まっているのでは？”と感じ、この研究を始めたのです。

でも、それには大変な恐怖と危険を伴いました。軍事政権から文民政権に代わっても、やはり反共国家ですから、活動家たちの周辺で反体制運動の資料を集めていた私は、どうやら日本でも韓国でも監視されていたようです。それで2000年に光州事件の本を出して、一応この研究を終えたことにしたのですが、今年日本で「光州5・18」という映画が封切りになって、その解説を映画会社から依頼され、再び光州事件に向き合うことになりました。実は出版当時は表に出せなかった資料もあります。映画も公開され、せつなく情報学環にきたのでこれらの資料をアーカイブとして見直し、当時の活動家たちが民主化を経て社会的に復権され、社会の中堅を占めていく過程で、光州事件やその後の運動をめぐるメディア化がいかに進展していったのか、もう一度洗い直す作業も必要かなと思っています。

Q 真鍋先生から「韓流ブーム」は どうご覧になりましたか

ちょうどその頃は双子の出産等、プライベートで大変な時期に重なってテレビどころではなかったし、もともと韓国ドラマは嫌いでした。でもブームの先駆けとなった「シュリ」や「JSA」、「ブラザーフッド」に「シルミド」、そして現在人気の「太王四神記」も監督や脚本家は学生運動世代の人たちで、私はそこに興味を惹かれます。民主化や祖国統一のために運動をしたけれど統一は成らず、彼らはそのやり残した宿題を作品に投影している

ような気がするんです。だからこれからはそういう視点で、韓国の映画やドラマもまじめに見直したいと思っています。

また「太王四神記」や「朱蒙」は高句麗が舞台ですが、90年代半ばから韓国では独島(竹島)とともに満州の領有権を主張する運動が起こって、大変な高句麗ブームです。高句麗の最大版図が満州で、韓国人たちはナショナル・アイデンティティの投影先として満州に思い入れがあるようで、ツアーがさかんです。韓国で出た中国旅行記を蒐集し、90年代末からは実際にツアーに潜り込んで客同士、また客とガイドとの会話等を密かに採集してきました。これらを使った新たな観光研究はこれから発信していくところです。

Q 近々ご出版の本があるそうですが……

教育大3～4年の時に「比較民話研究会」に参加し、奈良県東吉野村で共同調査をする傍ら、方言で採録された韓国の昔話を四苦八苦して訳し、研究会で発表していました。40～50編にはなるでしょうか。それから20年、当時の仲間を介して日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクトの一つ「豊かな人間像の獲得」のサブグループ「伝承の現場からの考察」に、韓国民話の研究者として召集され、2006年にそのメンバーで『「大きなかぶ」はなぜ抜けた?』という本を出しました。これが別の出版社の目に留まり、同じメンバーで小学生向け副読本を執筆する依頼が来て、もうじき出版の予定です(『読み聞かせ』で親しむ環境教育(仮)くろしお出版)。お蔵入りしていた訳稿の思いがけないデビューです。“小学生向け”という点からしても、まさに教育大時代への本卦還りですね。

Q 学環は女子学生も多いので、女性研究者としてメッセージは？

博士課程に進む時、指導教授から就職できるまで結婚しないことが受け入れ条件と釘を刺されました。今は時代が違いますが、東大の前に勤めた地方国立大や私立大では構造的な問題もあって、育児休業はなし、学生募集のため休日返上で弾丸ツアーなみの国内外出張は当たり前、いわゆる悪平等で女性には過酷でした。とても出産とか育児とか言い出せる環境じゃない。東大は周囲の理解もあるし制度面でも恵まれているだけに、いずれ外の大学に職を得たらという想定で、今から将来をしっかりと見据えた人生設計をされた方がよいと思います。この手の哀話(笑)に興味のある方はぜひご連絡を!



学環学府から多数参加～東京大学企画展 「campus08」 in ARS Electronica Festival



9月4日～9日の6日間に渡りオーストリアのリンツにおいて、東京大学のキャンパス展が開催された。これは、ARS Electronica Festivalという、1979年から続くメディアアート分野における世界最高峰の催しの一画で企画されたものである。2001年より始まったキャンパス展(学校展示)は、これまで芸術を専門とする教育機関に限られてきたが、今回、総合大学としては史上初めて、東京大学が招致を受けた。これは、近年の横断的な表現(Hybrid Art)に対する関心の高まりから、東京大学におけるメディア技術研究が高く評価されたことを意味する。来年はMITのメディアラボの展覧が予定されている。総勢約60名が渡欧し、24の作品展示とワークショップ、コンファレンス(学生中心の交流会)、トーク(ブルックナーハウスにおける有料講演会)と盛りだくさんの内容になった。準備のため先発隊は8月25日から現地入りし、リンツ美術工芸大学の建物3フロアをすべて占拠しての大規模な催しになった。廣瀬研・苗村研・荒川研・館研・石川研・池内研・稲葉研・五十嵐研・広田研の研究成果群、水越研のワークショップ、学環制作展の作品群が一堂に会し、日本でもこれだけ集まったのは見たことがないという企画になった。約5,000人の来場者からはたいへん好評を博し、次の展示へ向けたいやうな誘いや、今後の人材交流・国際的な協働に向けたご提案を多数いただいた。最後に、全員のお名前を挙げることはできないが、キャンパス展の成功に向けて一丸となって多大な貢献をされた皆さんに感謝するとともに、ここで得たものが、これからの人生において大きな意味を持つことを確信している。(准教授・苗村健)



電通コミュニケーションダイナミクス 寄付講座・公開シンポジウム

「オープン・クリエイションの可能性」をテーマとするシンポジウムが、7月3日、情報学環・福武ホールにて開催された。多様な人々や企業、NPOなどのネットワークがオープンに構築される



権島助教の報告

点に着目して、これからの経済活動におけるクリエイションのあり方を考えた。濱田純一教授の挨拶に続いて報告に移り、最初に、権島榮一郎助教が「インキュベータ、もしくはニッチ生存可能環境としてのインディーズ」をテーマに、音楽産業のオープン・クリエイションに関する報告を行った。次に、都市のオープン・クリエイションに関して、札幌市経済局の石崎明日香さんから「地域ブランディング政策としての札幌スタイル」をテーマに、同市のGEL-Design社の附柴裕之さんから「オープン・クリエイションによる商品開発:『GEL-COOま』の実例から紹介するその効果と期待」をテーマに、それぞれ報告いただいた。これらの報告に続くパネルディスカッションでは、石崎雅人准教授の司会の下、電通総研の石川淳さんからのプレゼンテーションの後、報告者4名に加えて田中秀幸准教授もパネラーとして参加して討論を行った。フロアからの質問などに答えながら、オープン化することでクリエイションの活動が加速化される面があるのではないかなど活発な議論がやりとりされた。(准教授・田中秀幸)

本館1階 リニューアル

情報学環本館1階のレイアウトが変わりました。改築部分は情報学環のイメージに合ったデザイン性の高い一画となり、留学生のための新しいスペースも誕生しました。



留学生支援室：学際情報学府の留学生を積極的に支援するため、学務係の新しい機能として開設されました。ビザや奨学金、宿舎の問題から、勉強やコミュニケーションに関する相談、留学生を対象とした学内外のサービス紹介まで、留学生の皆さんの多様なニーズに応じていきます。



PROJECT

Interfaculty Initiative in Information Studies / Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo

バイオンデジタルアーカイブプロジェクト

池内克史研究室

近年急速に発達した情報処理技術を用いて文化遺産をデジタル化する試みを文部科学省リーディングプロジェクト「大型有形文化財のデジタル化ソフトウェア開発」として行ってきた。このプロジェクトを通して、カンボジアのアンコール遺跡群バイオン寺院(図1)のデジタル化を行った。

なぜバイオンか?

規模:バイオン寺院は、160m×140m×45mという非常に大規模な建造物である。このためデジタル化に際して、現在の技術限界が浮き彫りになり、研究のフロンティアが得られると考えた。実際、気球センサーを始めとする新しいセンサーや並列処理ソフトウェアの開発など、5つほどの博士論文が執筆された。

複雑な構造:バイオン寺院は、2重の回廊、3層のテラス構造、173の尊顔、窓飾りといった複雑な構造を持ち、平面図や立面図では十分に表現しづらく、3Dデジタル化が有効であった。

崩壊:バイオン中央塔は、年々傾いており、倒壊の可能性が指摘されている。万が一の倒壊の前に、デジタル化し記録することが必須である。



図1:バイオン寺院

デジタルバイオン全体データ

毎年10数名の大学院生・スタッフがカンボジアに3週間程度滞在し、5年の歳月をかけ、総計2万枚の距離データ、約200GBの距離データを収集した。

64ノードの並列計算機を用いてデータ処理を行い、全ての部分で1cm精度のポリゴンデータ表現を得た。図2にこれを示す。現在日本国政府アンコール遺跡救済チームが、この全体データをバイオン寺院の修復計画に使用している。また、巨大データを構造化し高速表示するソフトウェアを開発し、図3に示すようなインタラクティブ表示装置として取りまとめ、オーストリア・リンツで開催された本年のARS-Electronicaに出展した。



図2:デジタルバイオン全体像

図3:高速表示装置とARS-Electronicaで展示の様子



尊顔ライブラリ

バイオン寺院には、173の尊顔が存在している。全ての尊顔をデジタル化しライブラリを作成した。図4に尊顔ライブラリの一部を示す。この尊顔ライブラリに線形判別法を適用し、「尊顔はデーヴァ、デヴァター、アシュラの3つに分類できる」との説を確認した。さらに、近接する尊顔の間に類似関係が存在することがクラスター分析から判明し、「複数の尊顔作成チームが近隣部分を独立して受け持った」という仮説を立てることが出来た。

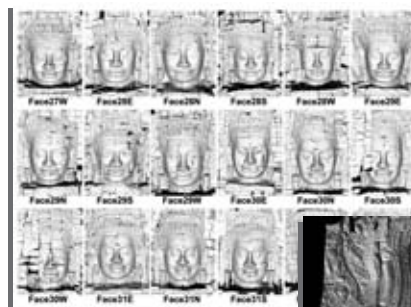


図4:尊顔ライブラリの一部 ▲

図5:宗教の変遷の証拠となる窓飾り(世界初の映像化) ▼



密封された窓飾り

バイオン寺院には、度重なる改築によって壁の向こうに封じ込められ、現在では容易に観察することが出来ない窓飾りが多数存在する。鏡を利用するセンサーを新規に開発し、映像化に世界で初めて成功した。これらの映像の中に、図5に示すように、仏像が、シバ神像に作り変えられたものを発見し、仏教からヒンズー教への変遷を示す証拠を見出した。

デジタル化の今後

現存する文化遺産の多くは、劣化・天災・人災などによる消滅・破壊の危険性があり、デジタルデータ化は急務と考える。得られたデジタルデータを利用した教育コンテンツへの応用やデジタル考古学の新展開への期待もある。これらの理由から高度・高価な情報処理技術開発がパイオフする分野であり、開発された技術は、新規センシング・巨大データ並列処理・高速表示技術の分野での新産業の種を提供するものとも考えられる。

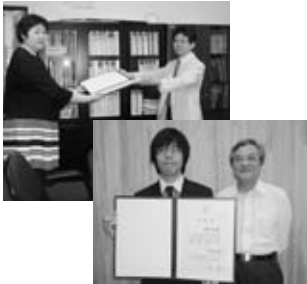
平成21年度修士課程 合格者発表



平成21年度修士課程入学試験が、8月25日(一次試験)、9月1日、2日(二次試験)に行われた。志願者数は200名。そのうち、82名(社会情報学コース20名、文化・人間情報学コース27名、学際理工情報学コース25名、総合分析情報学コース10名)が晴れて来年4月より学府の学生となる。

博士学位授与

6月20日、河西由美子さん(初等中等教育における情報リテラシーの育成に関する研究)、7月18日には別所正博さん(コピキタ空間識別基盤に関する研究)に博士の学位が授与された(かつこ内は論文名)。



辺見庸氏特別講義開催



7月2日、元共同通信社記者で芥川賞作家の辺見庸氏による教育部の特別講義「メディア・表象・資本の今日的変容と予兆」が、情報学環・福武ホールB2階の福武ラーニングシアターにて行われた。講義は辺見氏の元同僚である情報学環教育部非常勤講師の竹田保孝氏(共同通信社顧問)の招きにより実現。定員を上回る約200人の観衆を集めた。

講義は6月に起きた「秋葉原事件」を中心に展開。辺見氏は事件をcrime(法律上の罪)ではなくsin(宗教・道徳上の罪)と定義。フランスの学者レジス・ドゥブレヤカール・マルクスらの理論、さらにはハーマン・メルヴィルの「代書人パートルビー」やジョージ・オーウェルの『1984年』といった文学作品を引用しながら、事件の背景にある現代社会の問題点を鋭く指摘。同時に危機意識に欠けるマスメディアを

厳しく批判した。近年は健康問題を抱える辺見氏だがその舌鋒は衰えることなく、2時間の講義は好評のうちに幕を閉じた。(教育部研究生・工藤琢磨)

文の京・大いなる学びシリーズ の開催

社会や建築がどのように生きて、どのように死んでいくのか? 場作りに向けて学んでいくには…? 「地域デザインとしての建築～生老病死の建築学～」が7月3日、文京シビックセンターにて開催された。

前半は内藤廣東京大学大学院工学系研究科教授による講演。生老病死を通してみる都市の姿、本郷キャンパス内の建築物から墓地にいたるまで、さまざまな話題が紹介された。後半はパネルトーク。内藤教授、文京区都市計画部建築課の坂本洋介氏、原島博教授、松野将宏特任助教が参加し、まちづくりに関する議論が広がった。文京区民や、学生、区役所の方など100名以上の参加者は熱心に聞き入った。

文京区との連携事業「文の京・大いなる学びシリーズ」は大学における先端研究を地域住民の学びとして開放することを目的としており、今回は情報学環コンテンツ創造教育研究コアが主催する第3回目の催しとなった。(特任研究員・坂井理笑)



メル・プラッツ第8回公開研究会 開催

7月12日、工学部新2号館9階93bにて、メル・プラッツ第8回公開研究会「子どもの可能性を拓くメディア・リテラシー:社会教育の場づくりから考える」が参加者約50名を集め開催された。2007年7月の第1回公開研究会から1年、2年目を迎えたメル・プラッツの今年度最初の公開研究会のテーマは「社会教育」。メル・プラッツ運営メンバー/NPO子ども文化コミュニティの高宮由美子さんの問題提起に始まり、SKIPシティ映像ミュージアムの鈴木みどりさん、メディア教育開発センターの中川一史さんのプレゼンテーション、つづいて登壇者と来場者との間のトークセッションが行われた。学校教育の外側で、あるいは学校教育と連携しながら社会のさまざまな場で実践されている学びの活動について、メディア・リテラシーとのかかわりから多彩な議論がくりひろげられた。次回公開研究会、メル・プラッツのその他の活動については<<http://www.mellplatz.com/>>をご参照ください。(准教授・水越伸)

須藤修教授 平成20年度 総務大臣表彰を受章



6月2日、帝国ホテルで開催された情報通信月間記念中央式典において、須藤修教授が平成20年度総務大臣表彰を受章した。

表彰理由は、電子自治体の推進に多大な貢献をするとともに、政府各府省の業務・システム最適化、申請・届出などのオンライン利用促進等、世界最先端の電子政府構築に係る総合的な施策の推進に尽力したことによる。

これまで、大規模な研究プロジェクトである「ITの深化の基盤を拓く情報学研究」(研究代表:安西裕一郎)、「情報爆発時代に向けた新しいIT基盤技術の研究」(研究代表:喜連川優)という2つの文部科学省科学研究費補助特定領域研究に参加し、その研究成果をIT政策に結実させ、そのことがこの

度評価された。須藤教授は「わが国は、官・民・学の連携によって世界最先端の電子政府・電子自治体を構築しようとしており、今後とも研究を深め、その成果による政策への貢献に注力したい」と語っている。

受賞報告

■映像情報メディア学会丹羽高柳賞 (2008.5.26)

●原島博教授が、画像の符号化技術の研究およびコンテンツ技術への貢献ならびに学会活動への貢献によって功績賞を受賞。

●中洲俊信(原島研D3)・苗村健准教授・原島博教授が、「対話型似顔絵作成システムNIGAO」によって論文賞を受賞。

■東京大学第4回IML(Intelligent Modeling Laboratory)賞 (2008.6.17)

●吉野祥之(苗村研・2008年3月修士修了)がIMLにおけるオープンハウスにおいて展示したu-soulシステムが投票の結果、銀賞を受賞。

■3次元画像コンファレンス (2008.7.10)

●苗村健准教授の研究グループが「実時間自由視点画像合成のためのカメラレイシステムの構築とキャプレーション手法の検討」によって優秀論文賞を受賞。

人事異動

教員

採用	8/1	米倉将吾 助教
	8/1	南後由和 助教
再配置(転入)	6/1	大原美保 准教授(生産技術研究所から)
辞職	5/31	原田隆宏 助教
	6/30	Hay Wesley Dwan Charles 特任講師

職員

昇任(転入)	7/1	増田佳代子 総務係長(文学部・人文社会系研究科庶務係主任から)
配置換(転入)	7/1	筒井明子 図書係(生産技術研究所総務課図書チームから)
配置換(転出)	7/1	野口由紀 総務係主任(分子細胞生物学研究所総務チーム主任へ)
	7/1	庄司彦彦 図書係(農学生命科学図書館へ)

着任教員自己紹介

大原美保 准教授



6月1日付で生産技術研究所から総合防災情報研究センター(CIDIR)に着任しました。学際理工情報学コースに所属しています。工学系研究科社会基盤学専攻の出身で、専門は都市防災戦略です。現在は、災害状況をリアルにイメージしてもらうための動機づけ教材の開発と災害時の情報共有システムの研究に力を入れています。情報を効果的に活用することで、災害時の直接的・間接的被害を最小化することを目指しています。

【東京大学大学院情報学環・学際情報学府】

学環学府

Interfaculty Initiative in Information Studies

Graduate School of Interdisciplinary Information Studies

The University of Tokyo

number.

23